

児童健全育成賞（數納賞）奨励賞

障害を持つ子のためのヘアカット「スマイルカット」

京都府京都市

特定非営利活動法人そらいろプロジェクト京都 理事長 赤 松 隆 滋

1. はじめに【美容と子ども】

小学校の先生。僕が学生時代に憧れた職業のひとつ。だけど今、美容師という職業に就いている。そして、この職業に使命と誇りを持って日々生活している。それは、小学校の先生に憧れた僕が美容師になったからこそ、この充足感を得られたのだと思っている。

美容師の修行時代は本当に辛かった。技術を身につけるというのは並大抵な苦労ではない。何度も辞めようと思う日々の中、目に飛び込んでくる景色、それは先輩方の仕事ぶり。お客様とワイワイ会話を楽しみながらも、リズムよく動くハサミと櫛。実に手際よく鮮やかでキラキラしていた。「ありがとう」とお金を支払ってくださるお客様の笑顔を見て、早く僕もこの位置まで登りたいと思ったものだ。

そんな修行時代に温め続けたことがある。

『ヘアカットを通して、子どもが主役になれることを何かやりたい』

小学校の教員免許ではなかったけど、高校の教員免許を取得していた僕は、頭の片隅に美容と教育を融合した何かをやりたいと漠然と考えていた。

7年間の修行を終え、僕は自分の美容室を持つことができた。「独立」と言えば聞こえは良いだろう。しかし、小さな店であっても毎月の売り上げを維持するのはそう簡単なことではない。最初の3年間は生活費の確保のために必死

で働くだけで過ぎていった。山あり谷ありの中、年々少しづつお客様も増え、なんとか軌道に乗ってきた。時間に追われて一日が過ぎていく。忙しいのはありがたいことではあるが、決してキラキラしているとは言えなかつた。僕が求めていた独立ってこんなものなのか？自問自答を心の中で繰り返す中、ふと修行時代を思い出す。子どものために何ができるのだろうかと。先生になりたかった自分が美容師として何ができるのか。何か挑戦したい。ハサミを使って、子どもと触れ合える何かがしたい。

初めて美容室に来る子どもは、年齢にもよるが泣く子も多い。知らない場所で知らない人に突然髪を切られるのだから、わからないでもない。中には、大号泣して暴れてしまうので、保護者に押さえてもらってカットする子もいた。僕も仕事だからしようと割り切っていたけど、やはり泣いて嫌がる子を無理矢理カットするのは美容師としては辛い。このままでは美容室嫌いな子どもが増えていくのではないかと不安にもなる。

保護者さんの中には、美容室に連れて行くと泣くからという理由で、家でお母さんやお父さんがカットしているという方もいた。上手くカットできる人はいいがやはり難しく、失敗して相談にくる保護者さんも多くいた。僕はその都度、カットの説明をしていたが、意外にこの相談が多く、何度も同じ説明を繰り返している

ことに気づく。中には失敗してどう修正したらいいのかわからずに、うちの店に子どもを連れてくる保護者さんもいた。それでその子が泣いて、無理矢理僕がカットしていたら、なんのためにお店で切っているのかわからなくなる。だからといって、カット方法を説明して、ずっと自宅カットになってしまうのは困る。そう考えているうちにふと気づいたことがあった。

「子ども達が美容室好きになる仕組みを作ればいい」

2. 地域でのチャイルドカット講座

泣いてしまう子どものほとんどが2歳から3歳くらいと就学前の子どもが多かった。確かにイヤイヤ期や人見知りなどの年代だから仕方がないと思う。そして、カットが怖いと思うとお母さんにギュッとひつついで泣いてしまう行動がよく見られた。就学前だと24時間お母さんと一緒に過ごしている訳だから、心の拠り所はお母さんになってしまう。では、この年代の子どもを持つお母さんを集めて、カットの仕方を教えてみてはどうだろうか。そしてただ単に家でカットができるでカット代が節約になるということではなく、しっかり思いを伝える講座をしてみてはどうだろうか。

まずは、資料作りから始めた。友人のイラストレーターに頼み、かわいいイラストでカットの仕方の説明書を製作。カット内容は、前髪の切り方に限定した。横髪や後ろ髪の切り方も教わりたいと思われるだろうけど、そんな簡単にカットができるものではないという理由と、もうひとつ、あくまで美容室をゆくゆくは利用して頂きたいので、泣いてしまう幼少期はとりあえず目に髪が入らないように前髪だけでも家でカットしてもらって、そこで「チョキチョキ怖くないね」ってお母さんから子どもへ伝えてもらえるような仕組み。

さっそく僕は、説明書と前髪カット講座の趣旨説明を書いた資料を近くの児童館に持ち込んだ。しかし、児童館の反応にはとまどいを感じられた。それはそうだろう。誰かもわからない

人間が、いきなり約束もなく現れて、講座をしたいというのだから。児童館側は警戒もするし、営利目的なものと思われたのだろう。この教訓を生かし、自分の思いや経緯を資料にして近隣の児童館に郵送してみたが一向に反応はない。前髪カット講座は出だしで暗礁に乗り上げてしまった。

ある日、福祉関係の仕事をされているお客様に相談をした。今までの経緯と思いを説明し、いろいろ助言をもらおうとしたのだが、運の良いことに、お知り合いに児童館の館長先生がいることで、アポを取ってくださり、後日、その児童館に説明に伺った。館長先生は、僕の思いを理解してください、前髪カット講座をその児童館で開催する許可をくださった。僕は、今後もこの活動を続けていくためにも、第1回目の開催場所であるこの児童館の館長先生に講座名をつけて欲しいと依頼。数日後、館長先生から『ママにもできる！チャイルドカット』という名前でどうでしょうとの連絡を頂いた。その時、この『ママにもできる！チャイルドカット』講座が、7年後に開催100回を超えるなんて想像できなかった。

第1回目の『ママにもできる！チャイルドカット』は児童館側の告知の成果もあり、およそ20組の親子が集まってくれた。講座の前半はプロの美容師がカットウイッグ（カットの練習に使うマネキン人形）の髪を実際に切りながらレクチャーし、講座の後半は希望する子どもの前髪カットの実演をする。お母さん方は、我が子やお友達が可愛くカットされていく様子に、とても盛り上がってくれた。僕は講座の最後にこう話した。「幼少期は、美容室が怖くて泣いてしまう子どもも、大好きなお母さんがニコニコと楽しくお家でカットしてくれたら、きっと将来的に美容室好きな子になってくれると思います。絵本の読み聞かせをするように、子どもとのコミュニケーションの一環として前髪カットを楽しんでください。幼少期の良い思い出になると嬉しいです。そして、少し大きくなったらぜひ美容室にチャレンジしてみてください」。

『ママにもできる！チャイルドカット』に参加したお母さん方の口コミや、館長先生が紹介してくださったことにより、少しずつ講座の依頼が他の児童館からも来るようになった。当初、資料をいきなり持ち込んだ近隣の児童館や郵送で資料を送った児童館からも依頼が来るようになっていた。

3. 発達障害児との出会い スマイルカットへ

ある日、初めて行った児童館のこと。初対面にもかかわらずとてもフレンドリーな先生が、僕におっしゃった。「赤松さん、チャイルドカット講座が終わったら、ちょっと保護者さんの相談にのってあげて」。

講座が終わり、先生と2人の保護者さんと一緒にミーティング。このお母さん方は発達障害児の保護者さんで、子どもが大きくなることでの自宅カットの困難さ、歯医者でも全身麻酔をしないと治療ができない話などを聞かせてもらった。美容室に連れて行くのは現状では困難で、でもゆくゆくは一人で美容室の椅子に座ってカットができるようになって欲しいとのこと。それは自分が歳を取っていく、子どもよりも先にいなくなることに対する不安。「この子のできることを1つでも増やしてあげないと死ぬに死ねない」、お母さん方の深刻な話を聞いた後、すぐ先生は「児童館の遊戯室を提供するので、カットする訓練をしてくれませんか。私たち職員もサポートしますし、いきなり美容室でのカットは難しくても、通い慣れた児童館でのカットから慣らしていくべきいいと思うんです」と僕に切り出した。ちょうど、そのころ僕の中で決まり事があった。

「頼まれたら断らない」

とりあえずやってみて、駄目ならそこから考えようというスタンスでいたので、後先考えずオッケーをした。でも、発達障害をまったく知らずに取り組んだことは、今も反省している。

先生やお母さん方と何回かミーティングを重ね、厳密にいうとそこで発達障害について聞い

ていたはずなのに、あまりイメージができず、そんな大袈裟に捉えなくても何とかなるだろうと安易に考えていた。ただ、この子達は美容室でのカットが困難な子ども達。幼少期に美容室に連れて行ったときに子どもが暴れて美容師に嫌な顔をされたらしい。それがトラウマで保護者さんは美容室に子どもを連れて行けなくなっていた経緯は理解できた。

この活動を『子どもが笑って、保護者さんも笑って、そして美容師も笑って。みんな笑顔でカットをする』という願いを込めて『スマイルカット』と先生が名付けてくれた。

スマイルカットの初日。担当した子どもは小学2年生の男の子2人。一人は、バリカンやドライヤーの音にパニックを起こす聴覚過敏な子ども。僕はそんな子どもに安易な気持ちでバリカンを使用した。とても大人しい子だったので、襟足の見えないところならバリカンを入れてもバレないだろうと。例えバリカンに気づいても、すぐに隠せばいい。「え？ 何もないよ」って。僕は子ども騙しでなんとでもなると思っていた。しかし、バリカンのスイッチを入れた途端、あんなに大人しかった子は取り乱した。

パニックを起こした子どもを見たのは、この時が初めてだった。泣きわめいて遊戯室を走り回る子ども。お母さんは慌てて追いかけ、しゃくりあげて泣く我が子を強く抱きしめていた。「大丈夫よ。大丈夫よ」僕はただ立ちすくむことしかできなかつた。

もう一人は多動症の子ども。人懐っこくて泣き叫んだりはしない子だったが、動き回るので、児童館の遊戯室も、先生も僕たちもみんな毛まみれになりながらのカットだった。

このように第1回目のスマイルカットは散々な結果に終わった。カットができたというにはお粗末すぎる内容だった。

昔、小学校の先生になりました。子どもが好きだったから、子どもと関わる仕事に憧れた。美容師という髪を切るプロになった僕は、カットを通して好きな子どもをパニック状態にさせ

てしまった。動き回る子どもを満足にカットできなかつた。美容のプロなのにだ。情けない。

この苦い経験から、発達障害について真剣に勉強をした。独学ではあったが、書物を読みあさり、インターネットで調べたりもした。勉強すればするほど、発達障害は奥が深かつた。そして、全国には発達障害児が多く存在することも知つた。その後、福祉関係者の仲間もでき、専門家のセミナーにも参加させてもらい、少しずつ知識の引き出しを増やしていった。

正直、お店でカットできるようになるのは無理かなと思ったこともあつた。でも、スマイルカットの保護者さんたちは、大きな期待をしてくれていて、口コミの広がりは増していく。発達障害だけでなくいろんな障害を持つ子ども達のカットを担当することになつた。

障害があつてもなくとも、親は子どもに普通の生活をさせたいもの。散髪だけでなく、歯医者や耳鼻科などの医療機関、習い事と受け入れてくれる場所を常に探していることも知つた。

そして担当する子ども達から多くの大切なことを学んだ。多動症だった子は、終わる時間を決めて見通し立てることで、約束した時間まで立ち上がることなく座ってくれた。途中に何度も立ち上がりたくてウズウズしていたが、その都度時計を眺め、我慢して座ってくれていたのだ。この子は動き回る子じゃなく、僕たちがどのくらい座っていて欲しいのかきちんと伝えていなかつただけだと痛感した。多動症だから動きたいというのは確かにある。でも約束の時間は座るように頑張れる子どもだったのだ。それを「多動症はじっとしていられない」と決めつけて、できないレッテルを貼っているのは我々大人の方だったのだとこの子から教わつた。児童館でのカットが落ち着いてできるようになって、ついに美容室でのカットもできるようになった。初めて美容室でシャンプーをした日、彼はこうつぶやいた。「きもちいい」

僕はその言葉を聞いた時、鳥肌が立つた。半分は嬉しくて。そして半分は悔しくて。本当は、この子は美容室でカットしてシャンプーをして

「きもちいい」って感じる権利があつたのだ。幼少期の多動症のこの子に、僕らの業界にもつと理解があり、もっと優しい業界ならば、きっとお母さんは何度も美容室にチャレンジができたことだろう。

障害の程度は、人それぞれでまさに十人十色。障害児のカットのマニュアルなんてなかつたが、僕はその子のそれぞれの歩幅を大切にしていった。障害の特性を知るのは大切だと思うが「自閉症だからこのやり方」と型にはめるのではなく、その子一人一人の好きなことや苦手なことをリサーチして、それに対しても僕達まわりの大人が何をすべきかを考えていけばいい。大切なのは、ほんの少しの『配慮と工夫』なのだ。



4. スマイルカットの広がり 子どもたちから学んだこと

僕はスマイルカットの子ども達からたくさん大切なことを学んだ。この子達は「困った子ども」ではなく「困っている子ども」なんだと。だから僕たちが困っていてはいけない、僕たちにできることは笑顔で手を差し伸べることじゃないだろうか。

スマイルカットは口コミでの広がりが凄まじかった。こんなにカットが苦手な子どもが多いのかと唖然としたものだ。保護者さんからの依頼で、支援学校や保育園でもスマイルカットを行うようになった。もちろん美容室にもたくさんの中の障害児が来るようになった。僕はその子たちの歩幅を常に考え、カットがしやすい環境作りやカットの順番を示す絵カードの提示や、時計が読めない子も色で残り時間が一目でわかるタイムタイマーなどを用意した。実はこれらのアイテムは障害の有無にかかわらず、初めての美容室で、今からどんなことをされるのかイメージできない子どもに見通しを立てるのに実に有効なアイテムだとわかつた。

今までカット時に泣いていた子どもが多かつ

たが、見通しを立てて、怖くないとわかり、楽しい環境を作れば子どもたちは泣かずにカットができるようになっていったのだ。今ではほとんど泣かれることなくカットができるようになった。



スマイルカットをしていて気づいたことがある。

「悪い子なんて、ひとりもいない」

発達障害の子ども達は、子どものワガママや親の癖の問題だと間違った情報が出回っているが、声を大きくして言いたい。決して子どもはワガママなんかじゃない。そもそも発達障害は先天性の障害なので癖は関係ない。ワガママとされるのも、そこに必ず嫌がる理由があつたり、暴れる理由があつたりするのだ。それを障害のせいにするのは我々大人のエゴであり、理由を探ろうともしない怠慢なだけだ。我々周りの大

人達は、子ども達の「言葉にならない心の声」にどれだけ気づけるのか。そして杓子定規で物事をとらえずに、「みんな違っていいんだよ。みんなみんな大切なんだよ」って温かく見守っていくべきじゃないだろうか。

スマイルカットは美容室の椅子にひとりで座つてカットができるようになると『スマイルカット卒業証書』を渡している。この卒業証書をもらったことがきっかけで、苦手だった耳鼻科に挑戦できた子もいる。子どものやる気スイッチは何がきっかけでオンになるのかわからない。そのきっかけがカットならば美容師としてこれ以上嬉しいことはないだろう。

『ママにもできる！チャイルドカット』と『スマイルカット』から学んだこれらの子どもの心理をもっと理美容師さんに知ってもらいたい。いや、これはカットだけではなく子育て全般に当てはまる話。より多くの人に知つてもらいたいと活動を続けているうちに、啓発の必要性を強く思うようになった。では、どうすれば広まるのか。あくまで僕のコンセプトは「子

どもが主役」だ。「かわいそうな子」とか「大変な子」とか「お涙頂戴」みたいなのではなく、子どもが笑顔でキラキラしながらこの活動を広められないかと考えたのが、ヒーロー戦隊だった。オリジナルのヒーロー戦隊を作つて、児童館や保育園でヒーローショーをする。髪の毛を切らない子どもに悪さをする悪者と、髪を切る子どもを応援する美容師をモチーフにしたヒーロー。「よい子のみんな、チョキチョキしようね」と舞台でヒーローが伝える。美容師ならではの発想だ。さっそくイラストレーターの友人にヒーローのデザインをしでもらい、京都造形芸術大学の学生と共同でオリジナルヒーローを作り上げた。『星髪戦士（せいはつせんし）ピースマン』と名付けたそのヒーローは、学生が中心となりヒーローショーをしながら、子ども達への理解を求める啓発活動のシンボルとなつた。



5. 法律への働きかけ

ちょうどその頃、美容師法という条例の問題が浮上していた。児童館や支援学校等の美容室以外でのカットには美容師法という法律があり、その法律に抵触する可能性が指摘されていた。障害者の自宅へ美容師が訪問してカットすることは認められていた。しかし、児童館等の自宅でも美容室でもない場所でのカットに対して「児童館まで行けるのなら美容室にも行けるでしょう」というのが美容師法の見解となる可能性があった。発達障害等の障害の特性では、児童館に入れても美容室に入ることが困難になるのは周知の事実ではあるが、この美容師法が制定されたのは随分と昔で、この法律が指している障害とは主に身体障害であったのだ。

京都府が主催のイベントにピースマンが出演していた時に、知事が見に来られていた。僕は知事に駆け寄り、ピースマンを作つた経緯とスマイルカットの活動について説明した上で、美容師法が子ども達の可能性を狭めていることを

訴えた。突然の直談判に知事は驚かれたことだと思うが、「よし、やるか」とその場で美容師法の特例について前向きな返答を下さった。しかも即答だった。後日、僕は府庁の生活衛生課へヒアリングに呼ばれ、そこで「法律の改定は難しい」との説明を受けたが、その後、生活衛生課は福祉関係者へのヒアリングなど、水面下で前向きに検討を進めてくださり、一年後、京都府から公報が出された。

内容は以下の通り。

【京都府告示第470号】

美容師法に基づく衛生上必要な措置等に関する条例（平成12年京都府条例第7号）第2条第4号に規定する知事が特に必要と認める場合は、次のとおりとする。

平成26年8月26日

京都府知事 山田 啓二

身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害がある者であって、その障害により美容所において美容を受けることが困難なものに対して、その者の障害に応じた場所で美容を行う場合

知事名義で特例が出たのだ。これはあくまで京都府だけの特例ではあるが、その後、厚生労働省まで話が進み正式見解を頂いた。内容は以下の通り。

理容師法施行令第4条、美容師法施行令第4条（理美容所以外の場所で業務ができる場合）の一「疾病その他の理由により」の中には、身体障害者、知的障害者、精神障害者、難病患者、怪我人などが含まれる。出張理美容に関する衛生管理要領の衛生基準を守れば、理美容所に来ることができない者に対して理美容を行うことは可能。

当時の厚生労働省健康局生活衛生課課長補佐から「厚生労働省健康局生活衛生課としての正式見解です」との言葉を頂いている。これで、法に触れる心配もなく、全国でスマイルカット

の活動ができるようになった。ピースマンというヒーロー戦隊はすごい仕事を成し遂げたのかかもしれない。

6. 京都から全国へ活動の広がり・啓発

スマイルカットやピースマンがメディアに取り上げられることで拍車がかかり、活動への認知が増し、他府県からもスマイルカットの依頼が増えてきた。ほとんどの子ども達が、見通しや環境づくり、もしくは応用行動分析学（A B A）を駆使する方法でカットができるようになってきた。美容師側のやり方ひとつで可能性が広がることが裏付けられたと言ってもいい。きっと全国には、本当はカットができるのに、理解されずにカットできないままの子どもが多くいることだろう。このことを全国に発信するために、僕は仲間と『N P O 法人そらいろプロジェクト京都』を立ち上げた。美容師が中心となり、福祉関係者や大学の先生などにメンバーに入つてもらい、全国でセミナーや講演会を行なっている。スマイルカット実施店舗は増え、今では30店舗を超えた。

講演会でいつも伝えていることがある。子ども相手にマニュアルを学んだから問題が解決するというわけではない。もちろんマニュアルは存在するのだが、その前に一番大切なこと。それは、『楽しむ』こと。僕たちが楽しそうに子どもと向き合えば、いつかきっと子どもは心を開いてくれる。だから、子どもと触れ合う時はいつも笑っているように心がけている。

子どもとの関わりを楽しむことができた僕は、もっともっと子どもに楽しんでもらいたいと思うようになった。もちろん美容師として楽しみたい。昔、小学校の先生になりたかった美容師だからこそ、できることはなんだろう。

僕は、そらいろプロジェクト京都のメンバーに絵本を作りたいと伝えた。絵本を通じて、美容室好きの子どもを増やしたい。そして、カットができないとされている障害児への理解を求めたいと。絵本を作るといつても僕は絵が描け

ない。でも、この問題は大したことではない。『ママにもできる！チャイルドカット』での説明書や『スマイルカット』の絵カードをデザインしてくれたイラストレーターの友人がいる。問題は出版してくれる会社探しと予算だった。メンバーの大学の先生が出版社を紹介してくださり、事務担当の仲間が助成制度や賞の応募などにより予算を工面してくれた。一人ではできることは限られているけれど、みんなの力を合わせれば可能性は大きく広がると実感した。

僕は、今までの経験を絵本に全て詰め込むつもりで内容を考えた。カットが苦手な男の子にボーサボーサがイタズラをする。そこにピースマンが現れ助けてくれて、カットの楽しさと大切さを伝える。頑張ってカットができた男の子は、幼少期のトラウマを思い出す。悪者と思っていたボーサボーサは幼少期の自分を助けようしてくれていたのだと。

ここに詰め込んだのは、美容室好きの子どもを増やしたいというメッセージの裏側に、「悪い子なんてひとりもいない」「みんな違っていいんだよ」「それぞれの歩幅で一歩ずつ歩んで欲しい」ということ。



構想から1年以上かかり、絵本は出版社を通して全国の書店に並んだ。そらいろプロジェクト京都では、予算の許す限り、小学校や幼稚園、図書館、児童館等にこの絵本を寄贈した。

7. おわりに 【心のバリアフリーをめざして】

『ママにもできる！チャイルドカット』は、通算100回を超えた。現在はNPOのメンバーでもある女性美容師が引き継いで講座を実施している。彼女は4歳の子どもがいるママさん美容師。自身の子育て体験を通して、子育て中のお母さんの気持ちに寄り添うようなスタイルで温かい講座を開催してくれている。

星髪戦士ピースマンは、京都造形芸術大学の学生が毎年後輩に引き継いでくれており、今年

も児童館や保育園でヒーローショーが開催できた。ピースマンを製作した頃の初期メンバーは結



婚して子どもができており、感慨深いものがある。その子達が物心ついでピースマンを見に来てくれたらと思うとワクワクする。

スマイルカットを利用した子どもは、現在のべ2,500人を超えた。まだまだ全国に困っている子どもとその家族がいると思うと居た堪れない気持ちになる。僕は、スマイルカット啓発のため講演会や大学、美容専門学校などで授業をさせてもらっている。美容専門学校で授業している時に思ったこと。この学生達のほとんどは将来美容師になるはず。では、専門学校で扱うテキストにスマイルカットのような、障害がある人への美容室の対応について記載があったならば、きっと将来的に心のバリアフリーが全国に浸透するのではないかだろうか。今、そらいろプロジェクト京都のメンバーで協議をしながら、将来美容専門学校の教科書に、福祉とその配慮について記載してもらえよう、厚生労働省に嘆願しているところである。

僕はこれらの活動を楽しみながら美容師をしている。そして休みの日には、自分が作った絵本を片手に児童館などに訪問して絵本の読み聞かせをしている。ただ、絵本を読むだけではなく、プロジェクトにイラストを投影し、時に絵本のキャラクターが動く仕組みにして、子ども達に『えほんらいぶ』という名前で読み聞かせを楽しんでいる。読み聞かせ前に「いのちの授業」と称して、「悪い子なんてひとりもいない」「みんな違ってみんないい」「障害をもつ人、その兄弟のこと」など少し考える時間も作っている。

小学校の先生になりましたかった 美容師は、今、先生ではないけれど、子どもの前で話をしている。



子どもと触れ合っていつも楽しんでいる。そして、子ども達からたくさんの大切なことを学んでいる。

京都から始まったこの小さな活動が、地域に育てられ、それを基盤にして色々な形に広がり、全国のたくさんの子ども達の笑顔を増やしていく。みんなの笑顔あふれる素敵な世の中になるよう、これからも子ども達のために一歩ずつ進んでいきたい。